駒場友の会

会報第７号

「ご父兄と教養学部長との懇談会」報告

六月十日（土）駒場キャンパスにおいて、本学学生のご父兄と教養学部長との懇談会が開催され、約一二〇名が参加されました。

これまでご父兄と学部長が親しく懇談する機会がなかったことから、駒場友の会が、会員・会友になっていただいたお父様・お母様方を対象に、このような機会を設けることになったものです。

十時半から教養学部十八号館ホールにおいて、木畑洋一教養学部長による講演「駒場が若かった頃、私が若かった頃」が行われたあと、十一時二〇分からキャンパス・ツアーが行われ、続いて十二時半から駒場ファカルティハウスにて懇親パーティが開催されました。

木畑教養学部長の講演は、昔と今の駒場キャンパスをプロジェクターで映し出し、駒場の地が変化してきた様子や学生の姿の変貌等についてお話しされたもので、ご父兄は興味深く聞き入っておられました。

続いて行われたキャンパスツアーでは、木畑教養学部長、浅島誠前教養学部長をはじめとする教員十名がそれぞれ参加者十名ほどを引率して、図書館、講義棟（五号館の新しい教室、一号館）、課外活動施設（コミュニケーションプラザ北館等）、美術博物館、教員研究室等に案内しました。一号館では時計台に昇り、浅島研究室では蛙の心臓を顕微鏡で観察。ツアーの最後には九〇〇番教室でヘルマン・ゴチェフスキ助教授によるパイプオルガンの演奏が行われ、一同、キャンパス散策を楽しみました。

駒場ファカルティハウスで行われた懇親パーティでは、木畑教養学部長の挨拶のあと、浅島前教養学部長の乾杯、ご父兄代表のご挨拶が行われました。小川桂一郎助教授のカンツォーネ独唱、木畑教養学部長との記念撮影もあって盛会となりました。アンケートにご父兄からの感動と感謝の声が多数寄せられました。

「ご父兄と教養学部長との懇談会」の懇親パーティ

【お父様・お母様からの声】

浅島先生にご案内いただいた研究室は大変興味深く感動いたしました。私共のような素人にわかりやすく、丁寧にしかも熱く説明下さり、また研究員の方々も一人一人紹介されるなど、学生さんを大切に育てておられる先生のお姿に深く感動いたしました。またこのような機会がありましたら参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

大変有意義な会でした。学部長さんのお話はとても楽しく駒場の歴史を身近に感じました。懇談会でも先生方を囲み、親にとっては〝遠い存在〟だった東京大学の保護者になった実感がひしひしとわきました。

東京に行ってしまった息子に会いにゆくのを口実にこの会に参加しましたが、岡山から出てきた甲斐がありました。次回ももしこのような機会がありましたら、もっとたくさんの方々に参加していただきたいと思いました。

時計台に登れたことは感激でした。緑の深さにも感激しました。すばらしい環境を維持するばかりではなく、さらに充実していくべく駒場を応援したいと思いました。

第三回総会報告

駒場友の会第三回総会は五月二〇日（土）に駒場キャンパス内の学際交流ホールで開催されました。

総会は十六時三〇分より本間長世会長の挨拶で始まりました。以下、総会式次第に従い報告します。

（一）平成十七年度事業報告。高橋事務局長より以下の報告がありました。

友の会創設後二年目に入り、友の会の活動も徐々に活発になってきました。十七年度は会報を三号（七月）四号（十月）五号（一月）と三度発行しました。春の総会（五月二八日）と秋のホームカミングデイ（十一月十九日）の他十一月三日には「ユリヤ・チャプリーナ ピアノリサイタル」を開催し、多くの会員会友の皆様にお越し頂き、大変好評でした。また十七年度から「駒場友の会講演会」を開催し、第一回は十二月三日に本間会長に『雄弁について』と題して、第二回は十二月二〇日に辻亨会員（丸紅会長）に『総合商社の経営と囲碁』についてそれぞれお話しをして頂きました。その他駒場美術

博物館で開催された「バウハウス展」や「江戸の声展」を共催しました。

(二) 平成十七年度決算報告。高橋事務局長より決算報告がありました。四頁の「収支決算書」参照。

(三) 平成十七年度会計監査報告。浅島誠監事より「平成十七年度の決算報告について財務会計簿、銀行預金通帳、郵便局為替通知票に照らし監査した結果、決算を適正なものと認めます」との報告があり、承認されました。

(四) 平成十八年度事業計画。高橋事務局長より以下の提案があり、認められました。

①会報を年四回発行する。②六月十日(土)に「ご父兄と教養学部長との懇談会」を開催する。③十一月一日(水)に「鈴木秀美チェロ・コンサート」を開催予定。④学部と共催で「ホームカミングデイ」を行う。⑤その他講演会等を予定。

(五) 平成十八年度予算。高橋事務局長より予算案の説明があり、承認されました。

(六) 「登録団体規定」について。事務局の兵頭俊夫会員より以下の説明がありました。

会則十六条にある「登録団体」について、駒場友の会との関係を定める規則を設けることにしたい。これにより登録団体の活動を友の会としてサポートすると同時に、友の会と卒業生・修了生との関係を密に保ち、会員を増やす一助ともしたい。

(七) 会長の選出。会長の任期満了に伴い、小島憲道副学部長を仮議長に立て、会則二二条第一項に基づき会長の選出が行われました。会場から本間長世前会長が推薦され、大きな拍手とともに本間先生が再度会長に選出されました。任期は二年間です。

(八) 理事の任命。会則二二条第二項に基づき、本間新会長により副会長並びに理事が任命されました。大部分の方が再任ですが、古田元夫副学長・理事に替わり上杉道世東京大学理事が、落合卓四郎理事に替わり薩摩順吉会員が新たに理事になられました。

(九) 監事の選出。任期満了に伴い、監事の選出がなされました。会場より浅島誠教授と宮川雅雄事務部長が推薦され、次期監事として選出されました。任期は同じく二年です。

最後に本間新会長より閉会の挨拶があり、十七時二五分に終了しました。

なお、総会後に開催された理事会の議を経て、事務局長が山本泰会員に交代しました。

引き続き、十八時十分よりレストラン・ルヴェソンヴェールで懇親会が開かれました。五三名の方が参加。多くの方々のスピーチがあり、その間に東京大学応援歌「ただ一つ」の唱和もあり、和やかな雰囲気のうちに時間は過ぎ、十九時五〇分に閉会しました。

Nさんへ

森川建夫

その後お変わりなく、お元気でご活躍のことと思います。

先日久しぶりに井の頭線に乗る機会があり、なつかしい駒場東大前の駅と三七年前に卒業した駒場キャンパスをさっと眺めることができましたが、もう当時とはすっかり様子が変わりましたね。なんだ、かんだ言いながらやっぱり日本では成長が持続しているように思います。

今、JICA(国際協力機構)の海外シニアボランティアとしてここパナマ国のサンチアゴ市に住んでおり、もう一年が経ちました。パナマには一九八三年から八七年まで四年間、銀行の仕事で家族とともに住んだことがありますが、その時にこの国の人たちから学んだことが多々あり、今回はその恩返しもあって希望してきたわけです。さすがに二十年前とはさまざまな点で変化していてびっくりすることがありました。

最大の違いはご存知かもしれませんが、一九九九年末にアメリカがパナマ運河をパナマ国に返還し、同時に中南米最大の軍事基地も完全撤退したことです。太平洋とカリブ海を結ぶ南北約七十キロのパナマ運河とその両側五マイルの運河地帯は全くアメリカそのもので、アンコンヒルと呼ばれる小高い丘のてっぺんにへん翻と星条旗がひるがえっているのをかつては毎日見ていたものですが、いまは堂々とパナマ国旗がひるがえっています。また鉄条網を隔ててあちらは緑あざやかな、きれいに手入れされた運河地帯、こちらはごちゃごちゃして道路もごみだらけのスラム街という好対照でした。アメリカという国は時に偉大な民主国家の顔をみせますが、三十年近く前にカーター大統領とトリホス将軍が締結したパナマ運河返還条約もその一つであることは確かでしょう。まったく対価なしで無償で全てを譲ったのです。先日のLa Prensaという当地の新聞によると今年まで五年間で運河会社がパナマ政府に支払った税金の合計が七十年にわたってアメリカが納めてきた使用料を上回ったと報道されていました。

そしてパナマ市に高層ビルがなんと増えたことか。聞けば大半は外国人、なかでもコロンビア人の投資家?が建てているそうです。昔から当地は麻薬資金が入っていて有名でしたが、アメリカの撤退により加速化しているように見えます。この間一時帰国の帰りにトクメン空港から市内に高速道路で入ってきたのですが、日曜日の夜十時という時間にもかかわらずマンション群の部屋の明かりは半分もついていませんでした。

そんなパナマ市から車で三時間強、高速道路を西に走るとわがサンチアゴ

市に着きます。パナマ市民からはインテリオール（田舎）とやや馬鹿にされた言い方をされますが、とんでもない、住んでみるとまことに住みやすくとても良い町です。こじんまりとまとまっていて、道路にはいっさい信号がなく、また三階建て以上の建物がないことも解放感につながっているのでしょうか。今庭付きの一軒屋に単身で住んでいますが、毎朝隣家の雄鶏のコケコッコーという鳴き声で起こされる毎日を過ごしています。夕方涼しくなってから庭に面したパティオにハンモックをつるしてのんびりするのが楽しみのひとつです。

　ところで仕事のほうですが、このベラグアス県内に二九ある協同組合を管理、監督する協同組合庁というお役所のなかにひとつ机と椅子をもらい、主に貯蓄貸付組合の経営アドバイザーとして相談にのる仕事をしています。かつて日本にあった無尽講の規模を多少大きくしたものと想像してください。今年からこの仕事にくわえ、零細農協を支援する「家族農場自活プロジェクト」が始まり、ＪＩＣＡの資金ならびに日本大使館の草の根無償資金援助があてにされているためその推進役の一人に指名されていて、こちらも大事なプロジェクトなので最大限バックアップしてあげたいと考えているところです。ここから車で二時間奥に入ると、電気、ガス、水道、電話等の基礎インフラが無い地域が多くあり、車で入れずに徒歩二時間でやっと集落までたどりつくという時もあります。まだまだパナマには本当に貧しい農民が数多く住んでいることを実感しています。

　今回はじめてシニアボランティアとしてこちらに来たわけですが、おなじシニアボランティア仲間に人間的に素晴らしい人たちが数多くおられ、また青年協力隊員の中には何もないところに住み込んで活動している青年も多くいて、こういう人たちとの交流が大きな楽しみとなっています。まあみなさん少しというか大分日本の基準からはみだしているので傑作なお話が多々ありますが、このあたりはこの次のお楽しみということで今日はこのへんで。

　これから日本は入梅、あまり快適とはいえない天気が続きますが、どうぞくれぐれもご自愛ください。（四〇ＳＩ入学　一九六九年教養学科アメリカ科卒）

「すべてが普請ちゅう」

高辻知義

　東大駒場前の駅を降りて、教養学部の正門へ向かって歩いてゆくときの、目の前に現れる第一本館を中心とする建物群のたたずまいはいつも変らぬように思っていた。透かし彫りにした柏の葉の紋を中心にあしらった分厚い、二枚の門扉が開かれていると、その先の植え込みの、何と言う名とも知らぬ大木の向こうに、第一本館の時計台がそびえ、周囲のネオゴシックの建物群の中心を形作っている。

　ところが昨年ころからか、その時計台の向こうに第十八号館がその高い姿を現わし、時計台の姿を矮小なものに見せ始めた。これは、本郷キャンパスでも事情は同じで、安田講堂の時計台も背後の建物群に圧倒されている。さらには、戦後の一時期まで、東京の音楽会の会場として、独占的な地位を保っていた日比谷公会堂にしても、やはり時計台を頂く建物であるが、東大の時計台よりも早く、都心の高層ビルの谷間で、目立たなくなった。

　そもそも、時計台という建物が、大学の象徴となったのはいつのころからだろうか。かつて、それが表象していたものについては、建築史の横山正さんが詳しく書いていたように思うから、ここではこれ以上は触れまい。

　今年、九六歳の天寿を全うされた国松孝二先生には、駒場の昭和三十年文Ⅱ３Ｂクラスの担任としてお世話になり、二年後に文学部に進学すると、すでに独文学科の教授にかわられていた先生のご指導を受けることになった。箴言を能くされた先生は、みずからの「箴言集」を出版されているが、先生のお言葉で最もよく記憶に残っているのは、「ヨーロッパは石の文化だよ」の一言だった。これは、ヨーロッパ、ことにドイツを訪れるたびに実感されたことだったが、老来、ますます、その感を深くしている。

　歴史以前の時代にはゲルマン民族も、我々と同じように木造の建築に住んでいたようだが、ローマの文明の恩恵に浴していらい、石造りの大建築物を残すようになった。建築素材としての石は大きさが限られているから、それを積み上げて建物を築くしかない。しかし、石の壁を四方にめぐらしただけでは、建物として実用にならない。壁には戸口や窓が開いていなければならないが、そのための発明がアーチだったということは、鉄筋コンクリートという近代の構造に慣れてしまっていると気づかずに済んでしまうことになる。

　石をアーチ状に積み上げて、その頂点に要石をはめて、下に平面空間を確保する。地下室などであればアーチを直角に交差させて空間を立体的に確保する。コンピュータのない時代からこの工法を駆使して、大建築を建造してきたヨーロッパの石工たちにはただ脱帽のほかない。聞けば、モーツァルトの祖先は南ドイツのアウクスブルク近郊に住むモッツハルトと名乗る石工の家系だったとか。大伽藍の構造を脳中に描ける人々の血を引いたればこそ、彼が一時間を越えるミサの大曲の構造を、建築を透視するように脳中に描くことが出来たのに不思議はない、と言えるだろう。

さて、このアーチなるものに私は駒場でも出会っていたのだった。時計台を頂く第一本館の正面だけでなく、昭和初期いらいのネオゴシックの建物はいずれも正面にアーチを構えていた。そのイメージはそのときから脳裡に刷り込まれていたのだ、と今更ながら感じ入っている。

以下、いささか私事にわたるが、銀杏並木の東のはずれで、以前は一高いらいの寮と向かい合っていた、生協の建物が空き家になっていることに気づいた。その前身は、私が入学した頃は、木造二階建てで白塗りの建物だった。この建物が堂々としたコンクリート建てに変ると言うので、そのための費用のほんの一部でもなればと、誰が音頭をとったのか知らないが、九〇〇番教室で募金の演奏会が催された。会場の前にはドラム缶が置かれて、浄財を投げ込むようになっていたと思う。私は音楽部にいたので、駒場オーケストラの仲間と弦楽四重奏を演奏することになった。曲はハイドンの「セレナーデ」四重奏曲だったと覚えている。

こうして建てられた、この旧生協の建物も、いまや更地に変る運命にあるとかで、閉門蟄居を言い渡されたぐあいに静まり返っている。この国にあっては、僅か半世紀で建て替えられるのは致し方のないことか。鷗外が明治維新いらいの文明の情況を端的に言い表した「すべてが普請ちゅう」はいまも続いているようだ。（三〇文Ⅱ3B、一九六一年大学院人文科学研究科独文科修士課程修了）

会員・会友限定チケット割引

駒場友の会第一回演奏会（二〇〇五年）に出演してくださったユリヤ・チャプリーナさんが、本年十一月に再来日します。十一月二日（木）東京文化会館小ホールにて、十四時開演。このチケットを駒場友の会会員、会友に特別割引します。定価三千円（税込）が特別価格二千円になります。お申し込みは直接、株式会社オレンジノートへ。電話〇四五－五四五－四三一六（平日十一時－十九時、土日祝は休業）。E-mail：orangenote@mui.biglobe.ne.jp。申込時に会員番号を知らせてください（チケット発送料一〇〇円別途）。

爽やかな風に包まれてゆったりと
くつろぐことのできる

フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に
注文なさったコーヒーは、支払いの際に会員
会友証を提示下さいますと無料となります。

営業時間　11：00 ～ 14：30、17：00 ～ 21：00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

平成18年度駒場友の会予算案

収入の部　単位：円

	予算	内訳	
会費収入	4,600,000		
通常会員会費		2,000,000	1)
会友会費		1,000,000	2)
終身会員会費		1,600,000	3)
寄附収入	500,000		
雑収入	50,000		
預金利息		0	
その他		50,000	
小計	5,150,000		
前年度繰越金	6,296,950		
合計	11,446,950		

1)通常会員 500人分　2)会友 500人分　3)終身 20人分 10 x（60,000 + 100,000）

平成17年度駒場友の会収支決算書

収入の部　単位：円

	予算	決算
1. 会費収入	5,100,000	6,150,900
通常会員会費	1,200,000	1,970,800
会友会費	600,000	800,100
終身会員会費	3,300,000	3,380,000
2. 寄附収入	300,000	580,000
3. 雑収入	20,000	413,990
預金利息	0	10
その他	20,000	413,980
小計		7,144,890
前年度繰越金	2,405,491	2,405,491
合計	7,825,491	9,550,381

2.寄付収入の内訳は、鹿島建設（株）より300,000円、ウィルクハーン・ジャパンより200,000円、その他は個人の方々によるものです。

支出の部　単位：円

科目	細目	予算	内訳
1. 印刷費		600,000	
	1）会報・案内等印刷費		400,000
	2）封筒・便箋等の印刷費		200,000
2. 通信費		700,000	
	1）会報等郵送費		664,000
	2）電話使用費		36,000
3. 事務経費		400,000	
	1）事務用品費		180,000
	2）ｺﾋﾟｰ機ﾚﾝﾀﾙ料等		70,000
	3）ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ関連費		50,000
	4）振込手数料		100,000
4. 人件費		900,000	
5. 運営費		800,000	
	1）事務室借料		235,800
	2）会員証作成費		350,000
	3）光熱水費		60,000
	4）その他		154,200
6. 事業費		800,000	
7. 予備費		200,000	
小計		4,400,000	
次年度繰越金		7,046,950	
合計		11,446,950	

支出の部　単位：円

科目	細目	予算	決算
1. 印刷費		560,000	629,330
	1）会報・案内等印刷費	560,000	367,754
	2）封筒・便箋の印刷	0	261,576
2. 通信費		750,000	324,912
	1）会報等郵送費	690,000	292,185
	2）電話使用費	60,000	32,727
3. 事務経費		320,000	220,093
	1）事務用品費	200,000	101,850
	2）ｺﾋﾟｰ機ﾚﾝﾀﾙ料等	70,000	66,420
	3）ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ関連費	50,000	51,823
4. 人件費		700,000	62,600
5. 運営費		870,000	732,273
	1）事務室借料	500,000	235,800
	2）会員証作成費	210,000	290,724
	3）光熱水費	60,000	50,112
	4）その他	100,000	155,637
6. 事業費		0	1,284,223
7. 予備費		300,000	0
小計		3,500,000	3,253,431
次年度繰越金			6,296,950
合計			9,550,381

駒場友の会会報　第7号
2006年8月31日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メールアドレス
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページアドレス
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/